

有難い嬉しいことではないか。

もう僕は『みづゑ』が遅いだつて苦情は言はない、而してこの五周年紀念號に接して大いに有難く感激して益々研究し『みづゑ』の面目を汚さざる様にと大に勉強する心意だ。

あゝ！大下先生の御心勞を深く深く謝するより外にない

僕は『みづゑ』に親しんでより第一號が手にしたいと、いつもいつも思つて居たが今更ながら、ほしくなつた！。

繪筆日記の一節

廣島 神田 周三

一日

僕はいつも、書囊の中の繪具箱の片隅を占領して居るさ、此の暑いのに毎日く廣からぬ所とおとなしくかしまつてる暑さと言つたら此の筆では書きつくされんのだ。

二日

あまり暑いのでいつ知らず心地よく晝寝して居つたが、ごそごそと音がするので、ふと眼が覺めた、何をするのかしらは——
——主人公また寫生を初めたりしい繪具箱を引出す音がしたのである——繪具箱が出た以上僕はおとなしく主人公の命に従はんければならない運命なんだ。

時にはつらい事もあるが、ぼんぼん怒つた所で同じ事、やはり従順にして居る方が餘程よいかと一人定めさ。

扱て主人公は、僕を取り出してさふんと筆洗の中につけた、それも一時だが實に好い心地だつたよ諸君もすこしは經驗がある

だろ——暑い時に水中にはいつた時と同じ感じだよ。

今度は繪具を解きだした、初めに僕の毛をこすられる時は實につらいよ、然しそれも少しの間だから辛棒が出来るのだ、主人公は今迄にない四つ切を引張り出し、此の暑いのに一心に書きよるが今日はとても仕上るまい。

三日

昨日の處へやつて來た、構圖は一寸面白かるーと思つた清き小川の流を前景に、右手の岡の上にフカースグリーンの樹木あり、はるか彼方に森林あり、コバルトの淡き遠山あり、空は一面のオルトラマリんだ、すこし構圖が古くさいが主人公には適當だろ——。

しばらくすると學校歸りの子供がやつて來た、寫真取らあ——。寫真であるかい、寫生だよ。

と少し大きい子供が辯解したよ。

彼方に少女が野歌でも歌つて居るのだろ——、主人公の四つ切も仕上つたらしい。(完)

片々録

無茶丸

△去年の夏初めて寫生に郊外へ出た、傘など氣のきいたものはないから樹の蔭でやつてゐると、虻がやつてきて頭のまはり了幾度も幾度もまはつてブンブンとやかましくつて何も出来なかつた。こんなときには追つては却つて駄目だ、ぢつと靜かにうっちゃつてをけば暫くしてとこかへ飛んで行くものだ。